

「走りたい」思いでがん克服

一般の部の出走者の中には重いがんを克服したランナーもいた。『がん患者やその家族に元気を届けたい』とフルマラソンに臨んだ東京都港区の大久保淳一さん(49)は3時間58分16秒で完走し、病気から復活後の自己ベストを更新した。

大久保さんは外資系証券会社に勤めていた35歳のころ、取引先の勧めで走り始めた。2

東京の49歳 目標の4時間切る



003年からはサロマ湖100キロウルトラマラソン(北海道)に4年連続で出場したが、07年2月に右足首の骨折で入院。そこで精巣腫瘍(睾丸がん)が見つかった。腹部、肺、首にも転移しており、「5年生存率は49%。『最終ステージ』のがん」と言われた。3カ月の治療で、がん細胞は壊死していることがわかったが、抗がん剤の副作用から間質性肺炎を発症。肺が徐々に硬くなる病気で、一時は肺活量が半分まで落ち込んだ。

「もう一度マラソンを走りたい」という思いが闘病を支えた。病室では睾丸がんを克服した海外選手のDVDを見たり、マラソン大会のポスターを飾った。2

周辺のランニングも1周5キロを1時間かけて歩くことから再開。12年から100キロマラソンにも復帰した。ゴール後、大久保さんは「目標の4時間を持つことができる」とホッとした表情を見せた。いつかはサハラ砂漠を横断するウルトラマラソンを走ってみたい。患者同士の交流サイトを作ると、いつ目標もある。この日の走りでその夢に向

笑顔でフィニッシュする大久保淳一さん(中央)
川崎県土浦市の川口運動公園陸上競技場で20日
午後1時58分、矢頭智剛撮影